
若手スパイの暴れ日和

火野 歌流火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

若手スパイの暴れ日和

【Nコード】

N1942Y

【作者名】

火野 歌流火

【あらすじ】

圧倒的な実力を持ちながらも、無駄に明るくふざけた性格を所有しており一人前としての頭脳が足りず、厄介な事件ばかり引き起こすスパイ式佐野虎。彼の身に起きる（起こす）悲劇・喜劇・爽快劇！

プロローグ 若手スパイの謝罪日和

新しい年を迎え、世間がお祭りモードの頃。ある静まりかえった部屋があつた。

薄暗く広々とした室内には、派手な装飾が施された机と椅子。

机には、据え置き型のパソコンと、今にも崩れ落ちそうな数多くの書類が置いてある。

椅子には男が座っていた。中肉中背で眼鏡をかけた、エリート風な男である。

威厳のある顔つきをしており、同時に威厳のある気迫、オーラを全身から放出している。

その男の威厳のある顔は、怒っているようで、哀しんでいるようで、見下しているようで、疲れているようで、飽きているようで、諦めたような表情をしていた。少なくともその表情から好意的な感情は読み取れない。

その顔は自身の足元付近に向けられている。

正確には、自身の足元付近で土下座している男に向けられている。

「はああああ！！！！！」

と男が長く怒りの様なものが混ざったため息を吐きだした。

「……………いつまでそうしているつもりなのかなあ？」

酷く鬱陶しそうに、男は言葉をぶつけた。若干眠そうでもある。

「……………私はね……………本来こんなところで男の土下座を眺めているはずではなかつたんだよ！！！」

男が手で顔を覆った。

「君は分かっているのか？！今は元旦だぞ？！今世間はハッピームード全開だぞ？！皆初詣してるぞ？！年賀状見て微笑んでるぞ？！家族と笑ってるぞ？！恋人といちゃいちゃしてるぞ？！なのに……………なんでこんな！こんなところで貴様の土下座なんかを眺めてなきやいけない？！返せ！私の正月を返せ！私のハッピームードを返せ！

私の・・・私のイチヤイチャタイムを返せー！ー！ー！ー！！！！」

ありたつげの力を込めて咆哮した男は、顔を真っ赤に染め、息を荒げていた。

「ちよつと・・・九久崎さん・・・」

今まで無言で土下座を続行していた男が、しゃべりながら顔をあげた。

その顔は九久崎とは対照的に先程まで土下座をしていた人間と思えないほど爽やかな表情だった。

「俺の土下座を舐めないで下さいよ　泣きますよ　俺

いいんですか？」

「なにかっこつけてんだよ！」

九久崎が土下座男の顎を蹴り飛ばした。思いつつきり。

「ぐはっ」っとベタな声を上げ土下座男は後ろ向きに吹っ飛ぶ。

「いつつ・・・良い蹴り・・・もってんじゃねーか・・・です」

「敬語が使えない中学生かお前は・・・」

はははと土下座男は体勢を正座に変えて座りなおす。正座男の誕生。

「まったく・・・お前は土下座でも正座でも、俺をいらつかせてく

れるな・・・顔が見えないだけ土下座のほうはまだよかつたぜ・・・

・・・

「いやー！時間も土下座を続けていると九久崎さん、俺の顔忘れちゃうかなーって」

「お前のその憎たらしい顔は忘れらんねーよ！忘れてーよ！」

「うー九九八十一崎さん！嬉しいこと言ってくれるじゃないですか

！！！」

「お前は俺の名前忘れてっけどな！！」

「いやーさっきまで九九を復習してまして」

「土下座の最中になに考えてんだお前！！」

「七の段　強敵でしたね」

「その台詞でカッコつけてもただバカの印象を強めてるだけだぜ？」

「そういえば苦真裂さん。なにさっきあんなにプチギレてたんです

？」

「プチじゃねえよプチだよ！プチギリだよ！あと俺の名前のインストネーションおかしくね？」

「元旦がどうしたとか、俺のイチヤイチヤを返せとか、私にはカノジヨがないとか、正直耳障り極まりなかったです。謝罪してください。」

「なんでお前が怒ってんだよ！！あと彼女はいるわ！」

「ちょっとクリスマスイヴに別れたじゃねーっすか！ハハッ！」

「気さくに俺のトラウマを抉るな」

「本当ならクリスマスにプロポーズする予定だったのに・・・ね・・・」

「」

「おい！！・・・おい・・・」

「プランを考え、予習し、指輪まで買ったのに・・・クツ・・・」

「」

「やめてくださいひゃい！おねがいます！！！！」

甘噛みしてしまった。もはや威厳など消え去ってしまった九久崎。哀れである。

「泣かないでくださいよ告崎さん・・・」

「おまえなくさめるきないだろ」

号泣している九久崎をなだめつつ（いじめつつ）正座男は正座をやめて足を崩していた。

「で・・・許してくれませんか？この僕を」

「もうお前とは関わりたくないんだが・・・」

「ふふ・・・九久崎さんと僕は赤い鎖で繋がれちゃってますよ・・・えへっ」

「いつそ絞め殺してくれ」

九久崎には威厳どころか悲壮感が漂っていた。

「まあ・・・ねえ・・・うん僕はミスを犯しました・・・が！僕は全力を尽くしました！はい！」

そこをあなたは責められるんですか？今年32歳、彼女と別れ独り

身、日課は部下いじめのデスクワーカー九久崎楼支部長殿？」

「うるせー今年22歳、任務対象を殺し謝罪の身、日課は上司いじめのスパイ

式佐野虎くん」

「だから悪かったですってー反省してますー妄誓ー」

「字が別の方向性に傾いてるぜ？通称【ツインタイガ】くん」

「妄想しないって誓いますー猛省ー」

「ここで正解の言葉を使ってくんな」

「どこまでが想像でどこまで妄想ですか？どこまでセーフでどこからアウト？」

「しかも妄想すんの諦めてねえし」

九久崎は、はああとまた大きなため息を吐いた。

この先、このようなくだららない掛合いがさらに繰り広げられた。無駄に長く。

このままでは、式佐野のペースに乗せられなあなあで話が終わってしまう。

そこで九久崎がとった作戦は、『お説教』ではなく『お話』だった。子供に絵本を読み聞かせるように、道德の授業で物語を話すように。超大作超感動ストーリーを語った。超馬鹿の理性ではなく感性に訴えた。そして

「とういうわけだ。残念だがこの結末が真実だ。世界のことを想い自身の命を懸けても、待っていたのは非情な現実というわけだ・・・フフ・・・フハハハッ！なあ虎あ・・・現実って・・・辛いなよなあ・・・」

「うぐぐぐ・・・うえいえうぐ・・・ぐうえ・・・う・・・う・・・う・・・」

「私は・・・この人の死を無駄にはしない！彼女の遺志を継ぐ！お前はどうか？」

「うぐう・・・うん・・・うん・・・おでも・・・マリアのいじお・・・」

「・・・うわああああん」

「そうか・・・じゃあお前もこれからは清く正しく生きるな?」

「うん」

「しつかりと他人を愛するな?」

「うん」

「希望を持って前進するな?」

「うん」

「もう任務対象殺さないな?」

「うん」

「九久崎楼支部長を師とし尊敬するな?」

「うん」

「よし頑張れ!」

「うん!!!」

成功した。馬鹿は改心した。馬鹿は感動した。録音するのも忘れていない。

「よし!じゃあ生まれ変わった式佐野虎に新たな任務を言い渡す」

「応!この清く正しい清純派スパイにどんと任せな!!!」

「お前冬休み明けから小学校に教師として潜入しろ」

「おう・・・え?」

騒がしかった部屋が、また静まりかえり、日が高く昇った。

(了)

プロローグ 若手スパイの謝罪日和（後書き）

勢いで書いた小説です！最後まで読んでいただきありがとうございます！
ました！

てかこんなバカが教師って・・・よろしければ次も！！

EP1 若手スパイの登校日和

新年を迎えてから、すでに一週間程経過した。世の中の人々は徐々に普通の日常に戻っていく。自分の居場所へと戻っていく。

そんな中、新たな世界に飛び込もうとする男がいた。名は式佐野虎^{しきのこ}。職業はスパイである。

彼は今日から教師という聖職に就くことになっている。

『スパイと教師』とは異質とあっていい組み合わせだ。

しかもこの式佐野という男、教師どころか学生にも劣る頭脳の持ち主だ。

いくら任務とはいえ、無謀ともいえる人選だろう。

さらに潜入する学校が『小学校』だというのだから、全く笑えない冗談である。

「いいな 任務で潜入するといってもそこを破壊するわけじゃないんだ。壊滅させていいわけじゃない。むしろダメだ。小学生という無限の可能性を

秘めた子供たちの未来が懸っているんだ。いいな生徒達の未来を捻じ曲げるな？

いいな？わかったか？ おいモンハンやってんじゃねえ！」

出発する前に式佐野の上司である九久崎楼^{くくさきろう}が言った言葉である。

式佐野の失敗の尻拭いはすべて彼の仕事となってしまう。

なので彼も式佐野に執拗に、言い聞かせるように注意を促す苦勞人である。

まあそんな九久崎の苦勞を知ってか知らずか、言い聞かせなんか全く気にとめないのがこの式佐野虎である。

「はああ……めんどくさいなあ……」
朝、登校中の小学生や中学生で賑わう通学路。式佐野虎は佇んでいた。

式佐野の数十メートル先には、彼の勤務先である学校が建てられている。

「市立釜口宮小学校」ねえー変な名前」

いきなし失礼なことを呟く式佐野。常識がない。

「正直教師ってなにすりゃーいーんだろーなーしかも小学校って……」

式佐野はひどくのんびりとした口調で呟きながら学校に近付いていく。

数十人の小学生の中に気だるげな青年が一人、独り言を呟きながら登校。

かなり危ない状況である。通報されかねない。

今の式佐野の服装は、九久崎が調達したスーツ。もちろん着せたのも九久崎。

さすがというべきか、かなりセンスのいいスーツだ。色やデザインなど、

よく式佐野に似合っている（普段式佐野はシャツにGパン。味気ない）のだが

なにがあつたのか、ネクタイが変な方向を向いており、Yシャツもよれよれ。

だいなしである。まったく本人は気にしていない。

「授業って何教えるのかなー何年生やんのかなー給食おいしいかなー」

アホみたいな独り言を呟きながら、式佐野は学校に到着した。

「うーん」

式佐野は辺りを見渡してみる。校舎、校庭、生徒達。

「懐かしいな」なんて式佐野は思わない。思えない。

式佐野は小学生の頃からスパイとして活動していた。小学生時代の思い出なんか無い。まあそれを悲しいと思ってもらいたい。

それから式佐野は普通に職員室を目指し歩き始めた。

多少迷いながらも、マイペースに校内をふらついていた。

その途中、あるものを見つけた。

「オラツ！もってんだろ？よこせよ！」

「そつだそつだ！だせえ！」

「うぐぐつ」

数人の男子が一人の男子を取り囲み、なにかを脅し取るうとしていた。

「うわーほんとにこんなあるんだー！いじめだ！すげー！」

式佐野は仮にこれから教師になる人間とも、一般的な大人とも思えないことを呟いていた。

ひでえ男である。なに感激してんだ。さつさと助ける。

「まあー助けておくか」

ふざけんな。早くしろ。

「おい！やめんか諸君！その拳をおさめたまえ！」

よく分からないキャラで仲裁に入って行った式佐野。

「ああ？なんだよ？！　　つてうお！？」

小学生が式佐野を見るなり驚いた。当然ではある。

「おいおい・・・誰だよーあんたー？不審者かあ？」

完璧に馬鹿にした物言い。いじめっ子達がニヤニヤ笑みを浮かべている。

全く不躰だ。教育が足りない気がする。

「ふふつ　　強いて言うなら【慈愛の使者】と言ったところ

かな　　」

「先生ー！ー！用務員さんー！ー！誰かー！ー！ー！」

いじめっ子達が本気で引いていた。戦慄している。当然ではある。

不審者を見つけたら誰かに助けを求める。うん、しっかり教育され

た子供たちだ。

「はん　まるで変態扱いだなー神害だ」
字が普通とは違う気がするが、今の式佐野は自分を【愛の神】とか
思っているのだろう。

不審者すぎる。こいつ主人公か？

「では　この僕が君たちを教育してあげよう　式佐野先生
初授業だ」

いきなり教師ぶりやがったこいつ?!こええ!!

さて式佐野先生（笑）の授業はどうなるのか!?

果たして職員が駆け付けるまでの3分間で教育は終えることができるのか!?

（了）

EP1 若手スパイの登校日和（後書き）

勢いで書いた小説です！最後まで読んでいただきありがとうございます！
ました！

突っ込み不在で語り部が突っ込むしか！よろしければ次も！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1942y/>

若手スパイの暴れ日和

2011年11月16日17時05分発行